

編集後記

今読んでいる本のひとつに、滝上町出身の小檜山博という作家の『人生賛歌』というエッセイ本があります。作年の7月30日発行。

滝上町は私の生誕地。書店で目にとまったら必ず買います。

その本に次のような言葉がありました。

二十年近く前の夏の午後、ぼくは友人の祝賀会に出るため札幌駅前通りを歩いていた。歩道に三人の靴磨きの女性が座っていて、一人だけ客がいない。三人とも七十歳前後に見える。

ぼくは腕時計を見て、時間があるのを確かめ、客がいないため本を読んでいる女性の前の丸椅子に掛けた。女性が本を閉じて横の木箱の上へ置く。

その本の表紙を見て、ぼくは声が出そうになった。なんと、ぼくが書いた『無縁塚』という小説なのだ。驚いた。(中略)ぼくは動悸をおさえながら、うつむいて靴を磨いてくれている女性に「こんな本を読むんですか」と聞いた。

彼女は顔を伏せたまま「はい、私はこの人の小説が大好きで、『地の音』とか『雪嵐』は十回以上読みました。近くの図書館から借りるんですけど、どの本も五回は借りてます。

「この人の小説を読むと死にたくなるんです」と言った。

ぼくは絶句した。体を重い震えが走り抜けた。凄い読者がいる。(以下略)

すごい！

文字の力は本当にすごいと思います！

今回、北海道師範塾の研究紀要「北の教師道」第2号を作成致しました。

創刊号は16名の方から18本の原稿が届きました。今回の第2号は14名の方から22本の原稿が届きました。お忙しい中、原稿をご執筆下さった先生方、本当にありがとうございました。

みなさんの実践を文字にして残すということは、多くの方の目に留まるということでもあります。どの原稿も創刊号以上にバージョンアップしたものばかりです。「この原稿を読むと死にたくなるんです。」とまではいくかどうかわかりませんが、時間を忘れて読みたくなるものばかりだと自負しております。

皆様におかれましても、是非御一読なされることを願って編集後記の言葉と致します。



研究紀要「北の教師道」編集担当
斉藤満幸